



2022-1 次隊 岡崎 友里

がっこう まな き かい たいせつ 学校で学ぶ機会の大切さ

前は、ヨルダンの特徴的な学校である「UNRWA」学校に着目しました。ヨルダンにはパレスチナ難民の方々の他に、シリア難民の方々も生活しています。そこで、シリア難民の子どもたちに向けても同様に支援が行われています。私の知る範囲で紹介します。

ヨルダン国内での正確な学校数はわかりませんが、私が生活するマダバという地域では、全部で5校(女子校3校、男子校2校)の「公立」学校で「UNRWA」学校と同様に、1つの校舎を午前はヨルダン人、午後はシリア人と時間を分けることでそれぞれの子どもへの学校として運営しています。その5校のうちの1校「アミーララーヤ校」で、去年の9月(ヨルダンでの2年目の新年度)からシリア人の子どもたちへも情操教育の普及に向けて図工や音楽のアクティビティを実施してきました。週に2回という限られた日数ですが、他の学校と同様に目をきらきらと輝かせた子どもたちに囲まれて楽しい時間を過ごせました。



アミーララーヤ校



「アミーララーヤ校」とは…?

学校の役割: 午前「ヨルダンの公立小学校」/午後「シリア人学校」
通学児童: シリア人1年生~10年生(6歳~15歳)約700人
※私が活動したのは、1年生~3年生まで各3学級の合計9学級
教員: ヨルダン人
カリキュラム: ヨルダンの学習カリキュラム

働く先生によると、ヨルダンとは異なる国で家族が離れて暮らしている子がいたり、彼らの保護者が

は朝早くから働いていて、子どもたちは自分たちで支度をして、兄弟のいる子は、上の子たちが下の子たちの世話をしていたりすると話していました。また、えんぴつや消しゴム、勉強道具が十分にそろわず、持っていても、壊れていたり古かったりするものが多かったです。それでも子どもたちは学校に通い、熱心なまなざしで学んでいました。その姿には、胸が熱くなるものがあります。

公立学校での学びの機会があるものの、UNRWA学校のように自国の文化に触れる機会はなく、ヨルダン国内ではシリア人の就業には制限があり、偏った考え方や見方があり、生きやすい世の中とは言えない印象を受けます。ただ、学校へ行くことが叶わない厳しい生活をしていることを真の当たり前にして、日本のように一人一人に机があり、運動場やプールのある学校、ランドセルや体操服、教科書やノート…何でもそろい、少し古くなったら買い替えたり、また使える物を捨ててしまっていたり、物にあふれ豊かな国だからこそ、大切なことを忘れてしまっていた自分に気づかされます。



将来、ヨルダンで働く、ヨルダンの国外で働く、シリアへ戻って生活するための知識や技術を身に着けるためにも、学校での学びはとても意味のある重要なことです。算数やアラビア語、英語が重要視され、図工や音楽、体育と言った情操教育の実施率が低いことが課題のヨルダン。折り紙や工作、絵を描いたり、音楽に合わせて体を動かしたり、彼らにとっては初めての経験という子もいて、「こんなに楽しいのは初めて!」「アクティビティ(図工や音楽)を毎日やりたい!ゆり、明日も学校へ来て!」と言われました。日本では当たり前前に学校へ行き、学ぶことができます。算数、国語、理科、社会、体育、図工、音楽…たくさんの科目があり、その他の校外学習や行事があります。でも、それは「当たり前」ではないことを実感しました。



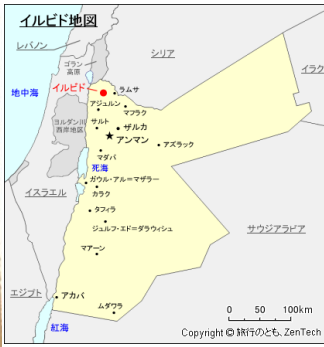
子どもたちが使うのは椅子と机が合体したもの。重たく、高さの調節ができないため、下学年には大きく、上学年には小さい気がします。学級によっては机と椅子が十分ではないため、2人がけに3~4人詰めて座ることもあります。

UNOPSと水について考える



ヨルダン国内にはシリア人の子どもがいるということが分かっていただいた上で、時間をさかのぼりますが、去年の12月11日にイルビッドという地域で子どもたちに向けて「水について考える」プロジェクトをUNOPS(国連プロジェクト・サービス機関)と協力隊で協同実施しました。そのことについて少し紹介します。(ヨルダンの水事情についてNo.3も参考にしてください。)

【プロジェクトの内容】
 場所: イルビッドにある公立学校
 ※右の地図参照
 対象: ヨルダン人7年生(午前)
 シリア人4年生(午後)
 目的: ヨルダンの水不足という状況下におけるSDGs達成に向け、生活でできることを考える。



「UNOPS(国連プロジェクト・サービス機関)」とは?
 UNOPSは、インフラ建設や、医薬品・医療機器・車両等の物品・サービスの調達と提供をはじめとしたプロジェクトの実施に特化した国連機関として、各国政府機関や他の国際機関より拠出を受け、紛争地や危険地域を中心に世界80カ国以上で年間1,000件以上のプロジェクトを実施しています。

ヨルダンの地形と気候

国土の約8割が砂ばく

国土の約7割が森林

ヨルダンの水不足には、以下のようなことが背景として挙げられます。
 ヨルダンは日本とほぼ同緯度にあり、四季が存在しつつも、降水量が非常に少なく、年間を通して乾いた気候から、水不足に陥っています。そのため、日本の国土の約7割が森林というのに対して、ヨルダンの国土の約8割は、砂漠です。
 さらに水不足の中、ヨルダン国内の難民の数は増える一方のため、水不足は深刻化しています。

ヨルダンで暮らす難民

増加する難民
 World vision ホームページより
水不足はより深刻化

日本とほぼ同緯度 四季がある

平均年間降水量	平均年間降水量
200 mm	1700 mm

年間気温は0~40℃前後
 年間平均蒸発量約2000mm
 10月~2月に少しの雨や雪が降るが乾燥している地帯
慢性的な水不足
 世界でも最も水資源の乏しい国の一つ

水クイズ!
 プロジェクトの中で子どもたちへ出題したクイズです。皆さんも考えてみてください!

السؤال
 ما هو المخلوق الذي يمكن أن يعيش طويلاً بدون ماء?
 A. البشر | B. جمل

Q: 人(A)とラクダ(B)どちらが水なしで長く生きてでしょうか?
الإجابة الصحيح
 B. جمل

A. 正解は、「ラクダ」です。ラクダは、2週間水なしで生きていくことができます。人間は3日間です。

さて、プロジェクトでは、最初にクイズを通して、生きていく上で水が欠かせないことについて触れてから普段使う水がどこから手元に来て、どのように循環しているのかについて学びました。最後には、水を大切に使うにはどうしたらいいか...水の効率的な使い方についても考え、雨水を貯めておいて、植物に水をあげたり、車の洗車をしたりするなど、具体的な方法が子どもたちから挙がりました。日本ではほとんどの人が毎日シャワーを浴びたり、湯船に浸かっていますが、これはヨルダンでは考えられないことです。日常生活の中で水のタンクが空になって水が出なくなることも多く、シャワーを浴びたり、洗濯するのは週に1回という家庭もあります。子どもたちから次々と考えが挙がり、自分の生活を反省しました。ヨルダンへ来て、家のタンクの水を使いきって水がなくなるといった経験も経験し、改めて水の大切さ、日本での蛇口をひねれば水が出るというありがたさを生活の中で身に沁みました。

JICA国際協力機構のFacebookにも少し掲載されていますので、よかったですらご覧ください。





2022-1 次隊 岡崎 友里

ラマダン^{づき}月がやってきた!

3月、日本ではまさに、お別れの季節となりましたね。6年生のみなさん、卒業おめでとうございます!ヨルダンでは、3月12日から30日間のラマダン(断食月)に入りました。私にとっては2回目のラマダンです。(ラマダンについてはNo.24~27を参考にしてください。)

そして、そんな3月、私も協力隊を卒業します!まだまだ名残惜しい気持ちでいっぱいなのですが、ヨルダンでの任期を終え、日本へ帰国します。ラマダンの最初の1週間を慣れ親しんだマダバで、一緒に働いてきた同僚や仲良くしてもらった友人に「イフタール」へ招待してもらい、最後までアラブ料理とアラブ人との時間を堪能しました。



イフタールのご飯の量に毎回驚いてしまいます。家族が集まって大きなお皿を囲むのはいいですね♪



ラマダン崩箇の限定デザートと言えば、「カターエフ」そのまま食べるもの、揚げたもの、焼いたもの、どれもおいしいです。



thank you

ふり返ってみると、いつもだれかがそばにいてくれ、常に人に囲まれていました。ヨルダンの人、いやもっと広くアラブ人は、外国人であっても「独り」にしない。させない。そんな人柄の人が多かったです。外国へ来て、自分が外国人として過ごして、少数派(マイノリティ)も体験しました。言葉が通じずに困ったことも、物珍しさにじろじろ見られたり、からかわれたりすることもありました。一方で、多くの方が「اهلاً وسهلاً (アハランワサハラン)」というアラビア語で迎えてくれました。意味は、「ようこそ、歓迎します!」とよく訳されますが、直訳すると、「(あなたが会った人は、)家族のような人です。どうぞくつろいでください。」という意味です。初対面の人でもこの言葉で迎え、アラブ人の人柄をよく表すアラビア語の一つと言えます。そして、私は言葉の通り、本当に家族のように迎えてくれる心温かい人たちと出逢うことができました。「ありがとう」という言葉では伝えきれない感謝の気持ちでいっぱいです。

日本に居た頃は、ヨルダンなんて、どこだろう?どんな人がいるんだろう?何食べてるんだろう?と「知らない」国の一つにすぎませんでした。しかし約1年と8か月の間、こうして生活してみると、「知らない人たちが暮らす知らない国」は、いつの間にか、「かけがえのない大切な人たちが暮らす親しみのある国」になっていました。ついに来た別れのタイミング、涙なしには別れられないほど、自分にとって大切な大きな存在になっていたことに気付かされました。

602日のヨルダン時間

人生で初めて上陸したヨルダンハシェミテ王国での生活、事前の情報からは知り得なかったことが起こり、刺激を受け、落ち込んだり、感動したり、本当に充実した日々を送ることができました。数えてみると、602日という時間をヨルダンで過ごしたようです。そのうち、活動した日数は324日、行ったアクティビティの授業時間は740時間。学校4校のうち、関わった先生たちは約100人、関わった子どもは、2000人以上。載せきれない写真、紹介しきれなかったことが山ほど…全てがかけがえのない宝物です。



現地の人たちはもちろん、ヨルダンで出会った他の隊員さんや日本人の方々、特にたまたま偶然同じ時期に同じ国へ派遣となった素敵な仲間(同期)に支えられ、ここまでこれました。残念ながらヨルダンからのお便りはこれが最後となりますが、読んでくださったみなさん、ありがとうございました!日本へ帰国し、新たな「始まり」を迎えるつもりです。いつかどこかで、また会いましょう!

Let's talk in Arabic ♪

最後に紹介するのは、現地の人々が挨拶の次によく使う?!文化や宗教も反映されているなあと感じる言葉です。

ان شاء الله インシャーアッラー 意味:神が望むなら/神のみぞ知る

イスラム教を信仰する人たちにとって全ては神によって決められたことという考え方から、例えば、「明日〇時に会いましょう。」と未来の予定を立てて伝えると、「インシャーアッラー(神が望むなら)」と返ってきます。もちろん人によって異なりますが、たったこの一言でも、「絶対とは言い切れないけど、明日体調が悪くなったら行けないかもしれない。でも、神が望みさえすればその約束は果たされるだろう。」という意味が含まれていることも…つまり、約束を取り付けたと思っても、人によってその約束の実現率は、この言葉では測り切れない大きな幅があるのです。人によっては強い意思からインシャーアッラーと口にして、約束を守る人もいます。一方で行けたら行くね。という軽い気持ちの人もあります。見極めの難しい言葉ではありますが、ある意味で流れに任せるおらかな性格も表しているつくづく感じました。

それでは、ここまで!みなさん、また会いましょう♪インシャーアッラー!

続きはまたいつか! مع السلامة